

水の源

MIZU NO MINAMOTO

Spring
2017
36

本がきっかけの まちづくり

ウォークルポ

コーヒーの飲む図書館
～常識にとらわれない新たな発想～

和歌山県有田川町

ウォークルポ

古湯温泉街を本好きの聖地に
～泊まれる図書館「暁」～

佐賀県佐賀市

首長リレー連載

北海道中川町

川口精雄町長

水源の里のうまいもん

鯖へしこ茶漬

福井県おおい町

島根県西ノ島町 「とって隠岐ソーデーウォーク」

2017年5月27・28日開催予定

西ノ島町・海士町・知夫村の3島にて開催されるウォーキングイベント。
西ノ島町では、28日に10kmコースのウォーキングが開催されます。
初夏の風に包まれて国賀海岸を歩くコースはとて気持ちがよく、毎年
全国から参加者が訪れます。

巻頭インタビュー 水源の里へ思いを馳せる

故郷の太鼓が原点

音楽家・ドラマー 屋敷豪太さん



故郷の太鼓が原点

音楽家・ドラマー

屋敷 豪太 さん

——ジャズなんかの演奏のとき、いろんな打楽器がありますね。

バスドラム（大太鼓）、タムタム（中太鼓）、シンバルなど主なもの7種類をドラムセットと呼んでいます。その他にもいろんな打楽器がありますよ。トライアングル、カウベルもお馴染みですね。演奏者が曲目などを考えて組み合わせを作るんです。

——屋敷さんがドラムとつき合うようになったのは？

ボクは京都府の綾部市で生まれ、育ちました。秋祭りのころ、勇壮な太鼓の音が聞こえてきてだんだん近づいてくる。胸が高鳴りましたね。これが打楽器との最初の出会いでした。それから「綾部太鼓保存会」に参加して、太鼓とのつき合いが始まりました。次の節目は高校生のとき。当時ドラムをやっていて、吹奏楽部の先輩から、京都府のコンクールに出るのでエキストラで手伝えと頼まれました。結果、銀賞をとりましたが、とても嬉しかった。そのときボクの進路は決まったように思います。ドラマーになろうって。



——故郷を飛び出し、東京・イギリスへ行かれたね。

20歳のときに上京しました。原宿あたりのバンドに目星をつけてオーディションを受け、バンドに入りました。そのうちライブを見てくれたMELONというバンドの目にとまってメンバーに入り、レコーディングのためにロンドンに渡りました。そこの空気がボクにピッタリのような気がしたんです。いったん帰国したんですが、もう腑抜け状態（笑）。それで今度は単身でロンドンへ。1988年8月のことでした。

Profile 屋敷 豪太 さん

1962年生まれ。1991年、SimplyRedに正式メンバー（ドラマー）として加入し、同年にリリースしたアルバム「Stars」は全英チャート1位を12週間記録。2年間にわたるワールドツアーにも参加した。近年、活動拠点を日本に移し、新人アーティストのプロデュースやドラマーとしての活動、自身のソロプロジェクト、またサウンドトラック制作という分野でも活躍している。



——ロンドンの生活はいかがでしたか。

とにかくもっと勉強がしたい。1年くらいかなと思っていたんですが、結局ロンドンには25歳から45歳までいました。ボクが所属していた事務所が日本のアーティストを世界に飛躍させたいという意欲を持っていて、サポートしてくれました。ロンドンには音楽畑の知り合いは2人くらいしかいませんでしたが、そのうちのひとりがすごい腕利きのプロデューサーになっていて、若手を育てていたんです。彼はボクがロンドンに着いて間もなく、スタジオでレコーディングする機会を作ってくれた人でした。

そのころのボクは演奏することと同時にコンピューターを使って音を作ることも関心がありました。いろんな楽器の音を作って。それを彼がプロデュースしていたグループ「Soul II Soul」が演奏して、大変なヒットになった。いきなり全英チャートにはいっちゃって、全英5位を記録しました。その後、「SimplyRed」にドラマーとして参加して作成したアルバムは全英チャート1位が4週間、5週間続いて記録的なヒットになったんですね。作っているときにはこれはいけそうだという

期待と自信はあるんですが、まさかこんな風になるとは（笑）。

——ふるさとについて、子供時代はいろいろ楽しい思い出がありますか。

網を張って追い込んだアユやハヤを、岸辺で焼いて食べたり、ワクワクする田舎生活が忘れられません。犬にまたがって田んぼを駆けたことも印象に残っていますね。

——今後、故郷とはどのように関わっていけますか。

3年前、ちょうど同じ時期に日本に帰ってきた妻と結婚しました。彼女も20年間、ニューヨークでオーガニック化粧品の仕事をしていて、今は京都で仕事を続けています。研究工房を作りたいと場所を物色していたんですが、故郷の綾部に決め、間もなくオープンします。ボクは京都と行き来しますが、京都縦貫自動車道も出来たし、便利になりました。地元のお祭りなど、お手伝いできることを楽しみにしています。

コーヒーの飲める図書館

～常識にとらわれない
新たな発想～

ありだ がわ
和歌山県 有田川町



【取材・文：永井 晃】

佐賀県武雄市がスターバックスコーヒーや蔦谷書店を併設した図書館を開設し話題となったのは記憶に新しい。「この町に生まれ、学び、育って良かった」と子どもたちに思ってもらえるまちづくりの観点から8年も前にカフェや漫画本を備えた図書館を開設した和歌山県有田川町。開かれた図書館『地域交流センター』の運営の中心として活躍される青石さん、永井さんにお話を伺った。

アメリカな雰囲気のカフェを併設する地域交流センター



高級感のある地域交流センター外観



ALECのスタッフ永井さん（左）と青石さん（右）

近くなった和歌山県

和歌山と聞くと、ある思い出が蘇る。今から30余年前、申本出身の友人宅に遊びに行く計画を立てた。日本海側の綾部を午前0時に出発し、一般道をひた走り（当時は高速道路網が未整備であったことや学生で高速道路を利用するお金もなかったことが理由）申本を目指した。夜が明けるころようやく和歌山県境を越えた。しばらく南進すると大型バスの大行進に遭遇。当時、甲子園常連校だった箕島高校の試合に駆けつける大応援団の車列だった。身も心もくたくたになってようやくたどり着いた友人宅。そのテレビからは箕島高校の試合が中継されていた。その時の記憶から、筆者の心には『和歌山は遠い』という印象が刻まれた。時を経て、再び和歌山を目指す。朝7時に出発して有田川町に到着したのは午前9時半過ぎ。申本まではまだ100km近くあるとはいうものの和歌山は近くなったものだ。

図書館の概念を打破せよ

有田川町地域交流センターは、通称ALECと呼ばれている。Aは有

田川町、Lはライフロング、Eはエデュケーション（教育）、Cはセンター。つまり有田川町民の生涯教育を支える施設ということだ。そして、その外観は高級リゾートホテル。土足での入館をためらったほどだ。

有田川町は2006年に吉備町、金屋町、清水町が合併し町制がスタートした。合併に先立ち実施された町民アンケートで、ほしい施設の第1位が「図書館」だった。しかし13億円を超える事業費を町の自主財源だけで賄うことは不可能。国からの合併特例債とまちづくり交付金に財源を求めたまでは良かったのだが……。これらの支援対象メニューに「図書館」は存在しなかったのだ。

ここから、国と地方の知恵比べが始まった。当時の国と町の間で交わされたやり取りを紹介してみる。町の担当者「地域交流の目的で雑誌や本を置いてもいいですか？」。国の担当者「もちろん大丈夫です」。町の担当者「3万冊ぐらいを考えているんですが……」。国の担当者「いっ、いですよ……（苦笑）。キツネとタヌキの化かし合いと言えはささか失礼か。

町では建設課、企画財政課、社

会教育課による庁内プロジェクトチームを組織。若手職員を中心にさまざまなアイデアが出された。中心人物である教育委員会の職員自身「なぜ図書館で飲食してはいけないのか？ 学生や高齢者、特定の本好きという固定客をもっと拡大できないか？」という考えの持ち主だった。13億円もの投資をするのであれば、すべての町民が利用できるものでなければ理解は得られない。

そのために、飲食をしてはいけない、一部の町民のみが利用するもの、堅苦しい雰囲気、という図書館はこうあるべきという概念を徹底的に叩き壊し機能重視に特化した。その集大成がALECなのだ。

利用者目線の逆転発想

そもそもALECは図書館法で定める図書館ではない。町民が集い交流するための「道具」として書籍を位置付けた。この「図書館ではなく書籍のある交流施設」という逆転の発想が、ALECの最大の魅力であり個性となっている。

高級ホテル然としたエントランスを抜けて館内に入ると心地よいBGMに迎えらる。東に面した全

面ガラス張りの窓からは柔らかな冬の日差しが射し込んでいる。利用者は、隣の会話が気にならないように広い間隔で置かれた椅子に座りながら読書や会話を楽しんでいる。テーブルにはコーヒーやサンドイッチなどが並ぶ。施設の北奥にはまちづくりのモデルとしているアメリカポートランド仕様のおしゃれなカフェがあり、コーヒーやサンドイッチなどが提供されている。西側の壁面に整然と鎮座する4万5千冊に及ぶ書籍と4万冊の漫画本がなければ、そこは間違いなく高級ホテルのラウンジそのものだ。小さな子どもを連れた母親が

アンパンマンの絵本を読み聞かせている。学生風の若者が連載漫画をテーブルに積み上げ没頭している。初老の紳士が新聞に目を通していている。若い女性たちがテーブルを囲みお茶を飲みながら談笑している。この風景こそが、プロジェクトチームの目指した姿のたろう。

ALECの未来予想図

1年間の一般会計予算が約150億円の有田川町。その約1割にあたる13億円の投資は議会や町民の間で大きな議論を呼んだ。バブルがは

じけて以降の「箱物行政」への厳しい風当たりに加え、町民の10%という図書館の利用率の低さが指摘された。そこで掲げた目標は年間8万人の利用者確保だった。町の人口は約27,000人。1人当たり年3回の利用は非常に高い目標と言える。そこで、利用拡大の手法として、多様なイベントが開催された。フリーマーケット、バンドの演奏会、落語寄席、地域企業と連携した盆踊り大会の開催など、枚挙にいとまがない。スタッフの知恵と工夫により開館から8年が経過した現在、年間13万人もの町民がALECを利用している。

4万冊を数える漫画本の収集には追い風も吹いた。マンガを集めているという噂を聞きつけた古本屋が無償提供を申し出たのだ。愚直な努力には神様も手を貸すものなのだ。また、懸念された飲食を伴うことでの本の汚れや漫画本の盗難なども皆無だという。それでも青石さんは「利用者は右肩上がりだ。でも、頭打ちの状況も見えてきた」と危機感を募らせる。

全町民はもとより、全国民を対象とした図書カードの発行による利用拡大PR、専門書を備える図書

館との差別化、電子図書館の利用促進としてWi-Fiの整備など、地域の情報発信基地としての対策は広範囲に及ぶ。

有田川町の課題は3町合併後の地域間格差だ。簡単に言うと中山間に位置する金屋と清水が疲弊し、吉備に人とモノが集中する状況となっている。町では「住みたい、住んで良かった」まちづくりを実現させようと各行政セクションがその軸に沿った施策展開を行っている。

図書館ができることは『本によるまちづくり』だ。青石さんは「時間がかかり即効性は望めないが、ALECでの絵本関連イベントや生

涯教育活動を通じ、有田川町民で良かったと思ってもらえる子ども

をたくさん育てていきたい」と抱負を語ってくれた。

取材後記

人間が生きていくうえで、様々な出会いがある。人格形成や価値観、生きるべき方向や夢を示唆してもらったり、学んだりする出会い。その大きなツールに本が位置づけられるのではないだろうか？人は一生の間にどれほどの本と接するのか。個人差はあるが、単純に1週間に1冊とすると1年に52冊。自らの意思で読むことのできる期間を70年と考えると3,600冊にも及ぶ。それ以外に学校の教科書、仕事に必要なマニュアルや資料。新聞、漫画などを加えると膨大な数になることは言うに及ばない。

そう考えると良い本との出会いはその人の一生を左右すると言っても過言ではない。誰もが持っている本の思い出。ALECは、町民の思い出づくりという大切な役割を果たすとともに、有田川町に生まれ育って良かったという町民の優位性を体験できる場所でもあったと感じた。



日本の棚田百選に選ばれた有田川のシンボル「あらかぎ島」



絵本の読み聞かせをする母娘のほほえましい光景

イベント会場として活用されるウッドデッキ



有田川町はこんなまち



和歌山県のほぼ中央に位置する、人口27,130人、面積351km²の町。2006年1月1日に吉備町、金屋町、清水町が合併して町制がスタートした。町の将来像を「きらめき ひろがる 有田川」と定め、人や自然、産業、伝統文化など、様々な「きらめき」を感じてもらえる町づくりを進めている。産業就業者数は、みかん農家をはじめとする第1次産業が約3割を占める農業立国。特産品はミカン、ぶどうなどの果実や有田川の清流に生息する天然アユとモクズガニなど。鎌倉時代の仏教に新風を吹き込んだ高僧「明恵上人」を輩出した。



北海道中川町

川口 精雄 町長

豊かさの源

持続可能な豊かさ

3年前、日本創成会議が示した「半数以上の自治体は消滅の可能性」に大きな衝撃を受けた。人口ビジョンと地方創生総合戦略を策定したものの、「人口減少が経済の縮小を招き、さらに人口減少が加速する」という負のスパイラルからの脱却は可能なのだろうか。

持続可能な農山村社会を守るには、「環境」「経済」「人」に対する戦略が不可欠で、達成は容易ではない。全国的に人口が減少する中で、何が持続可能な豊かさなのか。多くの自治体が正念場を迎えている。

田園回帰

わが町では7名の若者が「地域おこし協力隊」として活躍している。なぜ便利な都会生活を捨てて田舎暮らしを選択したのかを聞いてみると実に興味深い。共通しているのは「仕事を探していた」という理由ではなく「大都会の小さな菌車として生きるより、豊かな自然の中で人との絆や自分の役割を確かめたい」という「田園回帰」の価値観を明確に持っていることだ。

今、若者たちに「里山資本主義」が芽生え、確実に「逆都市化現象」

が始まっている。「地方創生」の本質とは、地域独自の多様な価値観で「豊かさの源」を探すことではないのか。

人口が減り経済が成長しなくても、自助と自立の精神で全国一律の横並びから脱却することで、意外に「青い鳥」は足元で見つかるかもしれない。

森林文化の再生

中川町は、地方創生総合戦略の柱に「森林文化の再生」を掲げている。森林は地域の産業経済を牽引しながら、国土を保全し水源の涵養や二酸化炭素の吸収など、環境維持の役割を担っている。水源の背後にある豊かな森林を守ることは地方に住む者の絶対的な使命である。多くの若者たちが、「森林文化の再生」の中に可能性を見つけ、北の大地で「きこりブランド」を立ち上げ、NPO組織やローカルベンチャーに雇用の芽が吹き始めているのは実に頼もしい。

「森には何一つ無駄がない。植物も動物も微生物もみんなつながって一生懸命生きている。(中略) 森には美もあれば愛もある。はげしい闘いもある。だがウソがない」。どろガメさんの愛称で知られる高



橋延清さんの詩だ。

21世紀は、豊かな森林の生命力のように、価値観の多様性の時代でもある。

てしおがわ 天塩川と生きる

朔北の大河「天塩川」は、北海道遺産の原始河川で流域住民の誇りでもある。住民と自然が共生する悠久の大河は全長256km、流域面積は5,590km²に及び、幻の魚・イトウが生息し、夏には「水切り選手権」や「カヌー大会」で多くの住民が水辺に集う。秋には紅葉を映す水面をサケが遡上し、冬には全面結氷する流れにアイスサークルが現れ、3月末には豪快に解氷して春の訪れを告げる。

その昔、天塩川を愛する仲間と源流を探索した時の感動が忘れられない。ひたすら険しい沢を登りつめ、ようやく源流地点にたどり着くと、大河は小さなひとしずくから始まっていた。

全国水源の里連絡協議会が組織されて10年の歳月が流れ、節目を迎えている。

綾部市の源流で始まった小さな流れに「地方創生」が力強く合流し、堂々たる大河へと成長することを願って止まない。



天塩川の豪快な解氷風景（3月末）



天塩川支流の源流探検で森林の豊かさを実感



水の源を育む植樹会



「きこり祭」に集う若者たち

ふるゆ 古湯温泉街を 本好きの聖地に ～泊まれる図書館「暁」～



佐賀県 佐賀市

【取材・文：白波瀬 聡美】



本が持つ可能性

本好きにとって、本と向き合う時間は特別だ。現実を忘れるひとときであったり、足りない何かを埋める作業であったり、欲求を満たす行為であったり、人生の道しるべを模索したり……対峙の仕方は人それぞれ。私にとっても幼少期から本は常に、自分の居場所を確認し、アイデンティティ形成に寄り添う、大切な存在だった。

今回の誌面のテーマは、本を介

した地域活性。取材先は佐賀県の古湯温泉にある「泊まれる図書館」だという。泊まれる図書館…それは本好きにとって、『ヘンゼルとグレーテル』に出てくる「お菓子の家」より魅力的で甘美な響きだ。運営するのはカラクリワークス株式会社のWebデザイナー白石隆義さん。

白石さんの本との出会いは、小学校の図書館だった。本を読まない両親だったため、自宅に蔵書はなく、図書館で本の魅力を知った。

本を借りては返すことを繰り返す子ども時代、大好きな本が暮らす図書館はとても居心地のいい場所だった。成長するにつれ本好きはさらに加速し、「いつか本を生業にしたい」そんな思いを抱くようになる。夢は「リタイヤ後に古本屋のオヤジになること」。しかし、実際はリタイヤ後まで待てなかった。Webデザイナーという本業のかたわら古本屋をオープン。39歳のことだった。嬉しい誤算というべきか、オヤジと呼ぶにはまだ早い年

で、自身の店を持つという夢を叶えた白石さんだったが、本への情熱はそこでとどまらなかった。次なる夢は「泊まれる図書館」を作ること。

アルベルゴ・ディフーズ構想

例えばネットカフェに行けば、電子書籍やマンガは夜通し読める。しかし、紙やインクの匂い、頁をめくる音が感じられるいわゆる「本」を夜通し読める施設はほとんどない。自宅よりもっとくつろいだ空間で、時間やスタイルを気にせずに本が読める場所を作りたい。漠然とした構想を本好きの仲間と共有する中から「図書館に泊まれたら楽しいんじゃないか」という発想が生まれた。そして「泊まれる図書館つくります」とWeb上に発信したところ、Facebookでたちまち5,000いいねを記録。予想外の多くの賛同に後押しされ、宣言への決意を新たにするとともに、「泊まれる図書館」の具体像について思案を巡らせた。

『スローシティ』（島村菜津著）という本の中に「アルベルゴ・ディフーズ」という仕組みが紹介されている。イタリア語でアルベルゴ＝宿、ディフーズ＝散らばっているという意味で、「散在する宿」が直訳。町に1つの受付があり、そこでチェックインして、まちの中のどこかの部屋の鍵を受け取り、食事は提携するまちのレストランでとる。既存の町の資源をつないで、暮らすように旅ができるという発想だ。



白石さんは、このアルベルゴ・ディフーズをヒントに、「泊まれる図書館」に日本ならではの温泉を組み合わせたまちづくりをしたら面白いんじゃないかというアイデアをひらめく。すなわち、本を介して人と人、さらには地域がつながり、まちのあちこちで本を楽しむ風景を紡ぐ「本好きの聖地」をつくる。「これこそ自分のやりたいことだ」ほんやりしていた具体像のフォーカスが定まった。

ペイ・フォワードの誓い

大きな核心への第一歩として、「泊まれる図書館プロジェクト」は動き出した。本好きの聖地となる舞台を求めて、温泉大国・九州の温泉地を巡り歩く。湯布院、別府、黒川……人気の温泉はどこも聖地にするには賑やかすぎる。求めるのは、温泉地としての高いポテンシャルを持ちながら、清閑で、このプロジェクトを受け入れてくれる懐の深さを持つところ。目に留まったのは佐賀県の「古湯温泉」だった。

古湯温泉は佐賀市内から車で30

分、福岡市内から車で1時間ほどの場所にある、山合いの風情ある温泉地。約38度のぬるめの泉温と、トロリとした心地よい肌触りから「ぬる湯」、「美人の湯」とも呼ばれ、地元の人々からも愛される存在だ。また、アララギ派の絵師として日本歌壇の最高峰といわれた歌人・斎藤茂吉が湯治に訪れた湯としても知られ、当時の滞在記の一節が刻まれた歌碑が静かに佇む。「日本の原風景が残り、かつ150万都市である福岡市内からのアクセスも良い古湯温泉は泊まれる図書館にこれ以上ない立地。映画祭などの文化的イベントも開かれ、文学に触れる土壌もある。人が温かいのも魅力」と白石さんはいう。

一方で、古湯温泉を有する富士町では少子高齢化が進み、仕事を求める若者の地域外流出が止まらない現状を抱えている。高齢化率は35%を超え、全盛期には30軒あった旅館が現在は13軒と半分以下になった。趣きある石畳のメインストリートもシャッター街となり、活気が失われつつある。

「泊まれる図書館」を起点に古湯温泉へ人を呼び込み、魅力を感じ

古民家をリノベーションした泊まれる図書館「暁」



てもらふことでまちを活性化し、夢を叶える恩返しをしたい。白石さんはその思いを「ペイ・フォワードです」と語った。ペイ・フォワードとはキャサリン・ライアン・ハイドの小説『ペイ・フォワード 可能の王国』に出てくる言葉で、自分が受けた善意や思いやりを、その相手に返すのではなく、別の3人に渡すことで「善意を他人へ回す」という思考。白石さんの中に使命感にも似た思いが沸々と湧きあがる。図らずも映画ペイ・フォワードのキャッチコピーが、このプロジェクトのキーとなりそうだ。「きっかけはここにある！」。

温泉街をひとつの宿に

2016年秋、古湯の空き物件のひとつである築110年の古民家をリノベーションして、泊まれる図書館「暁（あかつき）」はオープンした。屋号の「暁」とは、夜明けや明け方という意味。本に夢中になって、いつの間にか迎える朝の美しさと幸福な疲労感への想いを込めて名付けられた。「一日の中で夜の明けきらない暁の時間は、ほんの短い間です。その貴重さと贅沢さをカタチにしていきたい。本好きの聖地の入り口となる場づくり、そこからつながる新しい温泉文化の創造にチャレンジします」



コタツでくつろぎながら読書に耽るお客さん



穏やかな光が降り注ぐ縁側は、居眠りしそうな心地よさ

という白石さん。

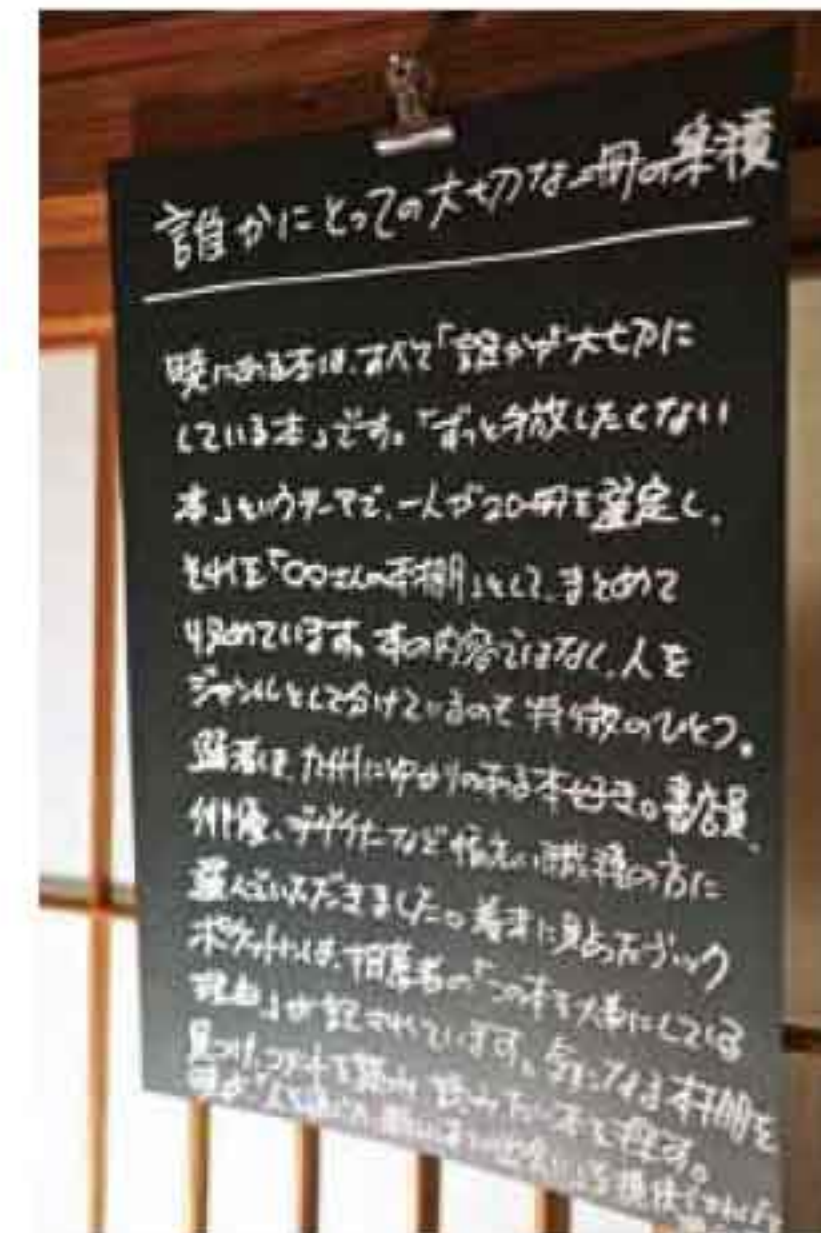
「暁」が提供するの、「本」と「寝床」のみ。それ以外の食事や入浴については、宿泊費に含まれるチケットで、地域にある飲食店や温泉を利用してもらう。イメージは「マチごと旅館」。そうすることで、人もお金も地域内を循環する仕組みだ。「オープン前に地元新聞が取り上げてくれたので、佐賀一円へは事前にPRができました。近所の人、なんか風変わりな人が来たぞ、みたいな反応でしたけどね」と笑う白石さんだったが、のちに新聞社へ情報提供してくれた人がいたことを知り、感謝していると話す。「暁」に注がれる好奇の視線は温かな期待に満ちる。

民間ならではの蔵書選

もともと材木商の別邸だったという古民家は、重厚感あるレトロモダンな印象。4畳半と6畳の和室には、九州産木材を使用した本棚が無造作に並ぶ。本棚の制作には地元の人も協力してくれた。蔵書は約1,200冊。九州の本好き60人にそれぞれ20冊の本を選書してもらった。テーマは「自宅の本棚にずっと残しておきたい本BEST20」。思い入れのある一冊一冊には「なぜその本を大事にしているか」のコメントが添えられている。ジャンルは小説、絵本、ビジネス書、料理レシピ本、漫画本に至るまで多岐にわたる。本の購入費をクラウドファンディング※で



一冊一冊に選者のコメントが添えられている



「暁」の蔵書は「誰かにとっての大切な一冊の集積」

募ったところ、募集開始からわずか3週間で目標金額を達成。このプロジェクトへの関心の高さが伺える。蔵書は、本の中身=コンテンツではなく、選者ごとに仕分けされ、棚に並ぶ。

「民間が図書館をつくる以上、公共図書館と同じように十進分類で並んでいてはつまらない。そこで、コンテンツではなく、人にスポットを当てる選出にしました。60人の視点から見た「一生ものの本。来館される方が大切にしたい一冊と新たに会えるようお願いをこめています」。その言葉通り、人に焦点を当てた蔵書のラインナップには、偏りや同じ本の重複がある。しかし、同じ本でも、思い入れは十人十色。コメントを見比べることで、1冊の本を色んな視点から味わうことができ、本に接する楽しさがより深まる。また、「この人が選ぶ本、私に合うかも」など、自分と趣味の合う選者の本棚を探すのも面白い。さらに、本好きを選者とするので、口コミで別の本好きへの拡散も期待できる。白石さんらしい「類は友を呼ぶ」広報戦略だ。蔵書2万冊を誇る地元図書館の館長さんも、「暁」を興味深く見守ってくれているそうだ。

本にひとり本と眠る

昼間はカフェ付きの図書館として、夜は図書館を丸ごと独り占めできる一日一組限定の宿泊施設として利用できる「暁」。古湯温泉の宿泊者と地元住人へは本の貸出も行う。取材時にも佐賀市内から来たというお客さんがコタツで寝そべって本を読んでいた。「一日中ゆったり本にひたれて最高です」と心底リラックスした表情。カフェで出されるコーヒーのこだわりは「冷めても美味しい」こと。冷えたコーヒーから、本を愛する店主の温かい思いが伝わる。

取材を終え、白石さんが帰ると静まり返った図書館が私だけのものになる。選者のコメントを辿りながら、お気に入りの本を選ぶ作業が愛おしい。近くの商店で薦められた地酒を味わいながら、夜更けまでコタツや布団でゴロゴロ、少し微睡み目覚めると、白々と夜が明けだすまで縁側で、備え付けのどてらを着て本の世界に陶酔する。夜明けとともに降り出した雨音で、いっそう心が満たされる。雨音と読書は実に相性がいい。「晴耕雨読」昔の人はいつも上手いことをいうものだと感心する。

個人的にどうしても、白石さん



店主の白石隆義さん。「暁」開業を機に富士町に移住した

お薦めの一冊が知れたかった。しつこく尋ねたが最後まで笑ってかわされる。「もちろん沢山あります。ですが、暁の蔵書に店主の色は付けたくないので敢えて封印してるんです。もし僕が明日死んでも、ここはずっと本の聖地として続いて欲しい。だから、僕以外の誰が引き継いでも続けていけるように思っていて……」そう言って優しく微笑む白石さん。まち全体で本を読むことを楽しむ文化を醸成するには、少なくともあと5年がかかるという。生まれたばかりの「暁」に日が昇る、今後の発展を見守りたい。そしていつか再来した「暁」には、店主入魂の一冊をこっそりと聞き出そう。

※クラウドファンディングとは、群衆(crowd)と資金調達(funding)を組み合わせた造語で、「ある目的」のためにインターネットを通じて不特定多数の人から資金の出資や協力を募ること。



コーヒーの香りに包まれる図書館。本に夢中になって冷めてしまっても美味しく味わえる

古湯温泉スポット紹介



古湯温泉街の石畳

白黒市松模様の御影石を使った石畳が続く古湯温泉街の中央通り。温泉街の活性化を目的に、住民一体となって進めた道路整備で、全国的にも珍しい取り組み。車道を狭く歩道を広く配して、温泉街と一体化した「歩いて楽しい」コミュニティ道路となっている。



古湯キッチン10

古湯温泉の旅館「千曲荘」が空き家をリノベーションして開業した食事処。温泉街の中心にあり、移住者の集いの場になっている。ランチの唐揚げが人気。古湯集落ではその他にも、空き家を活用した店舗が増えてきている。



英龍温泉

明治時代から地元で親しまれる、古湯のシンボルともいえる大衆浴場。「英龍泉」と「徐福泉」という温度の違う二つの源泉が利用されている。



嘉瀬川ダム

一級河川・嘉瀬川本流上流部に建設された高さ97mの重力式コンクリートダム。ダムによって形成された人造湖は「富士しゃくなげ湖」と命名され、佐賀県最大の規模を有するダム湖である。



ダムの駅「しゃくなげの里」

富士しゃくなげ湖のほとりにあり、美しい自然の景観が楽しめる物産館。つきたての棚田米や新鮮な地元野菜をはじめとする農産（加工）品が販売されているほか、レストランもある。地下100mから湧き出る天然水を求めて訪れる客も多い。



佐賀市はこんなまち

人口23.6万人、面積431.8km²。佐賀県の経済・行政の中心地。脊振山系の山麓部の山林や清流、有明海などの素晴らしい自然を有する。2015年5月には、渡り鳥のシギ・チドリ類飛来数日本一を誇る「東よか干潟」が、ラムサール条約湿地に登録された。また、同年7月には、日本初の実用蒸気船が造られた「三重津海軍所跡」が世界文化遺産に登録された。秋には嘉瀬川河川敷を中心に佐賀国際バルーンフェスタが開催され、バルーンのまちとして賑わう。

本誌に関する
お問い合わせ、
ご連絡先は

▲全国水源の里連絡協議会 水の源編集委員会
綾部市役所 定住交流部 水源の里・地域振興課 〒623-8501 京都府綾部市若竹町8番地の1
TEL:0773-42-4271 FAX:0773-54-0096 E-mail:suigen@city.ayabe.lg.jp
http://www.suigenosato.com/index.htm

定期購読のお知らせ

『水の源』が年4回お手元に届きます。年間購読料:1,000円(送料込)
お申し込みは、上記の電話、ファックス、メール、HPから

【文：並河杏奈】



若狭の伝統食、へしこの風味をぎゅっと閉じ込めた
鯖へしこ茶漬 1,285円 [税込み] (10袋入り)



福井県おおい町 **おおい町** 福井県
人口8,367人、面積212km²。福井県の南西部に位置し、北は若狭湾と小浜湾、南は京都府の綾部市・南丹市と隣接する。美しいリアス式の海を楽しめるレジャー施設「うみんびあ大飯」や、夏に開催される町の二大イベント「若狭おおいのスーパー大火勢」「名田庄星のフィエスタ」などをめがけて多くの観光客が訪れる。

株式会社 おおい
〒福井県大飯郡おおい町成和第2号1番地の1
TEL 0770-77-2811
http://shop.wakasa-ohi.co.jp

「へしこ」とは、鯖に塩をふってぬか漬けにした伝統的な保存食のこと。古来より鯖の水揚げ量が多い若狭地域で传承されており、それぞれの家庭やお店ごとに異なった味付けを楽しめるのが特徴です。また、少し焼くと香ばしくなるので、独特の風味を味わうこともできます。

「へしこ」の語源は、重石をかけて漬け込む動作、「**押し込む**」からきているといわれています。

「若狭おおい 鯖へしこ茶漬」は、そんな若狭が誇る特産品の「へしこ」を「たくさんの人にもっと気軽に味わってもらいたい」と独自のドライ製法で加工。へしこの風味をぎゅっと閉じ込めたものに、だしや具材を加えてお茶漬に仕上げたアイ

デア商品です。

地元の漁協婦人部加工部「たまてばこ」が作った化学調味料無添加のへしこを使用しており、「全国観光土産品連盟会長努力賞」も受賞しています。

まず、口に入れた瞬間に鯖の香りが鼻へ抜けていき、あとを追うようにへしこの風味が口の中へ広がります。へしこ好きにはたまらない一品。

お茶漬として楽しむだけではなく、おにぎりやチャーハン、パスタやピザのトッピングとして使ってみるのもいいかもしれませんね。この機会にぜひ、お試しあれ。

読者プレゼント

鯖へしこ茶漬 (10袋入り) 1名様

- アンケート
Q1. 面白かった・関心を持った記事
Q2. 今後取り上げてほしい内容
Q3. 水源の里への思いや本誌に関するご意見・ご感想

- プレゼント応募方法
はがきにアンケートの回答と住所、氏名、電話番号を明記の上、左記(P14)宛先『水の源36号』読者プレゼント係までご応募ください。
【平成29年5月1日(月)消印有効】

※ 当選者の発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。
※ ご応募いただいた皆様の個人情報は、商品発送以外の目的では使用しません。



上流は下流を思い、 下流は上流に感謝する

全国水源の里連絡協議会は、過疎・高齢化の進行により消滅の危機に直面している集落を「水源の里」と呼んでいます。全国170の市町村が連携し、集落再生に向けて活動しています。



- 北海道**
新十津川町
下川町
美深町
中川町
清里町
豊浦町

- 青森県**
西目屋村

- 岩手県**
遠野市
一関市
葛巻町
西和賀町

- 宮城県**
七ヶ宿町
富谷市

- 秋田県**
東成瀬村

- 山形県**
小国町
飯豊町

- 福島県**
喜多方市
相馬市
下郷町
南会津町
北塩原村
西会津町
磐梯町
猪苗代町
柳津町
金山町
昭和村
矢祭町
川内村

- 栃木県**
日光市

- 群馬県**
上野村
南牧村
みなかみ町

- 東京都**
檜原村
奥多摩町

- 新潟県**
長岡市
津南町
関川村

- 福井県**
おおい町

- 山梨県**
山梨市
笛吹市
上野原市
甲州市
早川町
身延町
道志村
小菅村
丹波山村

- 長野県**
根羽村
泰阜村
上松町
木祖村
王滝村
木曾町

- 岐阜県**
高山市
飛騨市
本巣市
揖斐川町
富加町
川辺町
七宗町
八百津町
白川町
東白川村
御嵩町
白川村

- 静岡県**
小山町

- 愛知県**
新城市
設楽町
東栄町
豊根村

- 三重県**
津市
熊野市
大台町
大紀町

- 滋賀県**
長浜市
高島市
米原市

- 京都府**
京都市
福知山市
舞鶴市
綾部市
宮津市
京丹後市
南丹市
京丹波町
与謝野町

- 兵庫県**
丹波市
多可町
神河町

- 奈良県**
天川村
川上村

- 和歌山県**
田辺市
有田川町
日高川町
すさみ町
古座川町

- 鳥取県**
若桜町
日野町

- 島根県**
松江市
浜田市
出雲市
益田市
大田市
安来市
江津市
雲南市
奥出雲町
飯南町
川本町
美郷町
邑南町
津和野町
吉賀町
海士町
西ノ島町
知夫村
隠岐の島町

- 岡山県**
真庭市
里庄町
鏡野町

- 広島県**
庄原市
神石高原町

- 徳島県**
美馬市
佐那河内村
那賀町
牟岐町
美波町
海陽町
東みよし町

- 香川県**
まんのう町

- 愛媛県**
西予市
久万高原町

- 高知県**
東洋町
奈半利町
田野町

- 安田町
北川村
馬路村
芸西村
本山町
大豊町
土佐町
大川村
いの町
仁淀川町
中土佐町
佐川町
越知町
梶原町
日高村
津野町
四万十町
大月町
三原村
黒潮町

- 佐賀県**
佐賀市
多久市
嬉野市
- 熊本県**
阿蘇市
- 大分県**
大分市
佐伯市
臼杵市

- 宮崎県**
延岡市
綾町
木城町
諸塚村
日之影町
- 鹿児島県**
日置市
伊佐市

私たちは水源の里を応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会
一般社団法人 全国浄化槽団体連合会
全国森林組合連合会
全国農業協同組合連合会

電気事業連合会
独立行政法人 水資源機構
公益社団法人 大分県薬剤師会